

日本人は上手にヒマを作れるか？

日本人は今、余暇を十分に活かしているのでしょうか？
日本で長く生活し、日本人以上に日本についての洞察を
深めているケイト・クリッペンステーン氏、
ドイツ文学・ドイツ語文化に造詣の深い池内紀氏、
CEL研究員鈴木隆が、日本人の働き方、人生の楽しみ方、
時間の使い方について、
海外からの目線をからめつつ語り合います。

撮影／須田 俊哉

Ikeuchi Osamu

Kate Klippensteen

Loose

Suzuki Takashi

Special Feature / Beyond ON-OFF

Part

3

スがとれてくる時代だと思っていたのですが。

最近でも、居酒屋などで、皆同じような服装をして、上司らしき人が、いわゆる「オヤジギャグ」というのでしようか、何か言うと、皆一斉にどっと笑う。ぼくがかつて願っていたような若い人たちの個人生活ではなくて、むしろ、集団に依存する傾向が強くなってきているのでは、と思います。

——いかに「個」を確立し、「個」で過ごすことができるかが、要のようですね。

情報から 解き放たれて 歩く楽しさ

——定年後などの時間の過ごし方について、より具体的なアイデアをうかがいたいと思います。

池内 ぼく自身のことです。まず、「1人オリピック」と称して、4年にひとつ、何か新しいことを必ず始める、と決めていきます。歌舞伎、映画、町歩き、居酒屋とか。今年から4年間はこれをやってみようと、自分に対する一種のゆるやかな課題を出しているんです。

「1人オリピック」には必ず出場できませんし、4年ぐらいやると、けっこう上達するものです。少なくとも20から30くらいはやることを持っていて、そのなかで得意なものが5つ、なかで見つけますから、ちつとも不便はありません。例えば町歩きをしていても、電車の中でも、風景や人を見たりするときに、情報を持たない方がよく見えるような気がします。

旅行先でもそうです。ガイドブックに出ているところしか行かなくなる。ガイドがなければ、自分の目で責任を持って店でもなんでも選びますから、店との関係も自然にできる。今では、情報を持たないことが、かえって豊かなことなのではないでしょうか。

ケイト 好奇心を持つことにもつながってきますね。好奇心といえば、私は犬を飼っているので一緒に歩くことが多いのですが、犬は思いもよらないコースであっちこっちに動きます。私の住んでいる白金、高輪といったところには古い建物が残っているのですが、そのおかげで、偶然、意外なほど古くから残っているお屋敷に出会えたりします。**池内** 歩いている時間というのは、いいものです。例えば、最初の恋人とか、小学校の先生とか、いろいろな人が出てきて架空対話ができます。あんなに楽しい時間はありません。名所とか旧跡である必要はありません。近くの町でもいいから、ちよつと違う空間に自分を置いてみると、感覚が非常に活性化して、全身が生き生きしてくる。

そして、何度も言うようですが、情報を介在させないことが大切です。自分の体だけに任せてしまわないと、好奇心が働かない。

鈴木 「逍遥学派」というのもありま

も好きなものが3つ、それくらいでないと、趣味というものは全然支えにならないですね。

ケイト 趣味という言葉もちよつとピンとこないですね。英語で「hobby（趣味）」という言葉には、あまりいい響きがありません。好きなことを自然にやっている、という感じがしないです。「乗馬が好き」とは言っても、「趣味は乗馬」という言い方はちよつと……。

きつと、若いうちから、何か好きなことがあって、夜や週末は家族と一緒に過ごせて、というスタイルがうまくできていれば、個人のメンタルヘルスにもいいし、会社や社会の健康にもいいのではないのでしょうか。

池内 やっぱ、若いうちに、小さいうちに一度やったものでなければ、改めてやっても生きてこないですね。上手下手は別にして、高校時代などに遊びのなかでやっていたことが、何十年かあとで生きてくる。どこかにルーツがないと、糊で貼りつけただけの趣味はすぐにはがれてしまいます。小さいうちにいろいろやらせておくのはいいことなんです。もちろん、「稽古事」じゃなくて、例えばひとり旅に行かせるとか、自分の責任でやることです。

——今、学生たちは、将来自分にとっての楽しみをみつけられるような蓄積をしているのでしょうか。

鈴木 いやおうなく入ってくる情報を



すずき・たかし／大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所研究員。東京大学卒業後、大阪ガス(株)入社。国際大学大学院修了。社内起業で国内初・最大の住宅リフォーム仲介サイトとなる「ホームプロ」を立ち上げ(株)ホームプロ代表取締役専務。帰社後、2012年から現職。マーケティング・消費者行動における理論と実践の統合に取り組む。著書に『リフォームを真剣に考える』(光文社新書)など。

Suzuki Takashi

処理するのが精いっぱい、じつくり腰を据えて何かをするという時間が減っているかもしれません。情報が増えたことは、必ずしも歓迎すべきことではなくて、情報が少ないなかで何をするか考えた方が、よりクリエイティブな時間が過ごせるのではないのでしょうか。**池内** 自分の生きている時代に、メディアがこれだけ発達するとは思いませんでした。メディアと、それが送り出す情報にあふれた時代に、自分のやりたいことを探し出すのは至難の業で



Special Feature Part 3 / Three-way Talk

す。情報はみなキレイに着飾っていますから、そこから選別して自分に何が合うか判断するのは、難しいことです。**ケイト** あとは、情報のための道具に利用されないことです。年齢性別関係なく、電車に乗ると携帯をずつといじっている人が多いですよね。確かに、道具によっていろいろなチャンスが与えられるという面はありますが……。

鈴木 以前、ネットビジネスを立ち上げたとき、最初のうちは新しいことが面白かったのですが、そのうちこれはもういいや、と思うようになりました。最近、ネットとは距離を置き、必要ともしか触れないようにしています。

Eメールが始まったばかりの頃は、「24時間以内に返信する」という不文律がありました。それが最近ではだんだん短くなってきたり、「即答せよ」と(笑)。でも、即座に返事を書くものばかりになってしまったら、それだけで一日が終わってしまいますよね。

池内 そういう状況に陥っている人が多そうですね。

ケイト 確かに、最近メールの数が減っていて、「返事をしていないかも……」と不安になることもあります。メールの処理に時間がかかって一日中メールを見ているような状況にならないよう、なるべく時間を減らさなければ、と思っています。

池内 ぼくは全く逆の極端で、パソコンも携帯も、テレビも持っていないが、与えられたものがなければ自分で

したね。歩くとながら脳が活性化するのはないでしょうか。

ケイト 以前、ヴェネツィアの町を歩いているとき、ふと地図を捨ててしまつて、迷子になりながら歩いたらすごく面白かったことがあります。小さな町なのに大学がいっぱいあることに気づいたり、学生が行くような場所に行くこと意外なほどおいしいレストランがあったり……。

池内 ゲーテに『イタリア紀行』という著書がありまして、彼は、どこかの町に行つて宿に入つたら、まず初日は地図を持たずに町を歩くのだそうです。当然迷いますが、迷いながら歩く。2日目は、やはり地図を持たずに、高いところに行つて町全体を眺望する。3日目になって初めて地図を見る。さすが文豪は旅行の名人でもありますね。**ケイト** 現代人は、情報に囲まれているから眠っている感覚が多いと思います。五感が発達すれば楽しいことも増えますよね。

——情報にどつぷりと漬かっている時間を減らし、「個」のための時間を増やすことで、自分なりの発見や発想ができる。そして、情報を捨て、どんどん歩くこと。日々の積み重ねで、無理に興味などを探さなくても、自然に余暇や自分なりの時間の過ごし方が見つかっていく、ということですね。本日は大変参考になるお話をうかがうことができました。